なぜそのとき、私がその娘を買おうと思ったのか、はっきりとはわからない。
「お姉さん、わたしを、買ってくれませんか？」
「えっ？」
お姉さん、と呼ばれたけれど、おそらく年の頃は私とほとんど変わらないだろう。
ややオレンジがかったナチュラルブラウンの髪をサイドで束ね、ところどころに青を散らした白いワンピースで身を覆っている。胸元がやや大きく開いているのは、自分の「商売」を意識してのことだろうか。
晴れ渡った夜空のような澄んだ紫色の瞳には、何か強い意志のようなものを感じさせる光が浮かんでいて、こんな深夜の繁華街の物陰には似つかわしくないように思える。
「お姉さん、わたしを……買いませんか？」
もう一度、まったく同じ言葉を繰り返すその声が微かに震えているのを感じて、私はそっと少女の肩に触れてみた。
「……！」
何かに耐えるように、少女の顔が強張る。
「君、名前は？」
膝を曲げ、やや下方から見上げるようにして彼女と視線を重ねると、
「なのは……たかまちなのは、です」
と、まるで怯えるように顔をそむけながら、その娘――なのはは答えた。
「なのは、か。可愛いね、良い名前だ」
指先をなのはの顎にあて、こちらを向かせる。
「あ、あの」
星空のように輝く瞳、その奥に見え隠れする陰は、不安の彩だろうか。
「……わかった。君を買うよ」
両腕で抱え込むようにして、私はなのはの身体を引き寄せた。
「え、あ」
髪を梳くように撫でつける。と、何か砂糖菓子のような甘い匂いが、私の鼻孔をくすぐった。
「じゃ、行こうか」
なのはの手を取り、返事は聞かずに歩き出す。
「あ、は、はい」
なのははそれを拒否することなく、私の半歩後ろを、歩調を合わせるようにしてついてきた。
「ねえなのは、君は、もしかしてこういうの……は……」
初めてなのか、と問いかけようとして、私は思わず息を飲んだ。
ネオンの七色の光の中に浮かび上がったなのはの横顔が、まるで星の光に照らされた天使のように、きらきらと輝いて見えたのだ。

――なぜそのとき、私がなのはを買おうと思ったのか、はっきりとはわからない。
だけど。もしかして。
私は、このなのはと名乗る少女に、魔法でもかけられたかのように、魅入られてしまったのだろうか――？

「どうぞ、散らかっているけれど」
家に入るなり、どうしていいかわからないという様子で玄関に立ちつくしていたなのはをひとまず室内に招き入れつつ、私は部屋の惨状を見て溜息をついた。
めったに人が来ることなど無いのを良いことにやりたい放題にしていたツケが、まさかこんなところで回ってくるとは。
「お邪魔、します……わ」
最後の「わ」に、がっくりと肩を落とす。
リビングのいたるとこに脱ぎ散らかされた洗濯物、出しっぱなしの食器に読みっぱなしの本と書類。さすがにゴミだけはこまめにまとめていたのがせめてもの救いか。
「あはは……えーと、とりあえずそこが寝室だから、そっちにいてくれるかな……」
奥の扉を指差す。ベッドとサイドテーブル、あとは小さな書架があるだけのそちらの部屋の方が、まだましな筈だった。

「は……はい」
が、なのはは寝室のドアと私を交互に見やるのみで、なかなか動こうとしない。
「なのは？」
「あ、あの、もしよかったら、その……シャワー、とか」
ああ。
そうか、と私は小さくうなずいた。
なのはは、私に自分を「売った」のだ。
それがどういう意味かは、彼女自身も理解している。
そこでいきなり、寝室へ、と言われれば、それはつまりそういうことだと思うのも無理はなかった。
「……そういうつもりじゃ、なかったんだけどな」
やや自嘲気味につぶやいて、私はなのはの手首を掴んだ。
「あっ……？」
そのまま乱暴に手を引いて、寝室に引っ張り込む。
「きゃあっ！」
突き飛ばすようにしてなのはをベッドに寝かせると、その上に覆い被さるように、私はなのはの身体にまたがった。
「なのは」
なのはの両の手首を片手で押さえつつ、ゆっくりと顔を近づける。
「あ……ああ」
なのはの身体が、はっきりとわかるほどに震えている。